

河七

原條

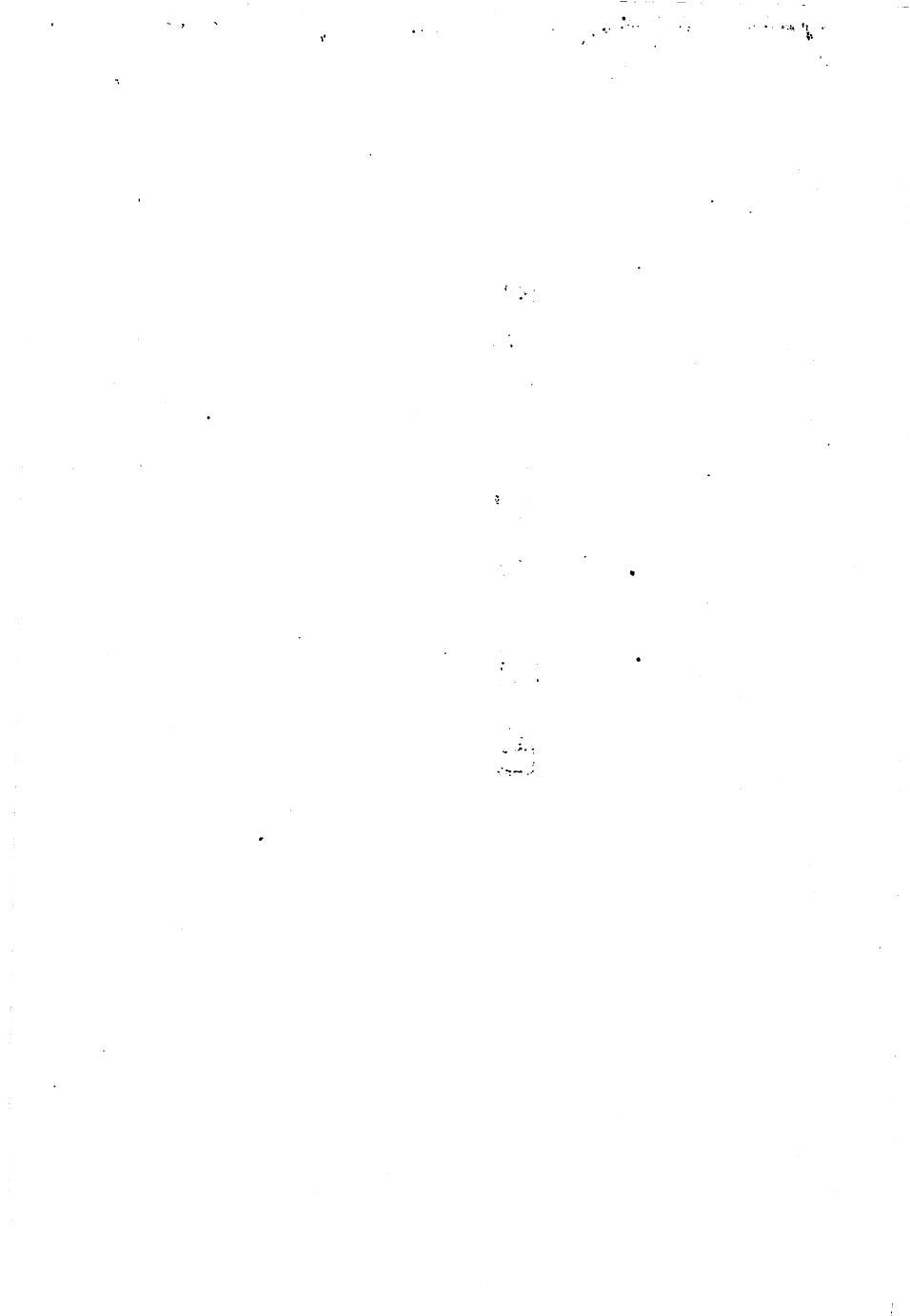
釜

淵

双

級

巴



七條 河原 釜淵 双級 巴

作者 並 木 宗 輔

釜 淵 双 級 巴

地唐土に フシやさしき名をば。付きたるは。緑の林白波と オクリ和言。唐音變れども變らぬ國のあれ鼠。石川の五右衛門とてもとは岩木の惣領なれども。河内の土民に育てられ農作きらひ大小を。好む鑑の フシつまりより。好まぬ事に旅姿 オクリ笠で。日の目をふせげども防ぎかねたる口の端に。 フシ所離れて何國へか。ギンオクリ生駒の。山の山つづき。鬼取よりも恐ろしき。摺む心の フシ鷲の峯。地龍は小川いがみ川。地曲りく／＼て身の上をそれと沙汰せじ佐太の森 フシ牧方近く着きにける。地色五右衛門暫く立休らひ。詞ハア、美豆野御牧に。鹿狩があるかして多くの勢子の聲。羨しやなあ。地我も武門の家に生れながら。如何なる事にや三つの時より捨てられ。百姓の家にて人となり。鋤畝よりも大小と心は一騎當千でも。詞人の物を我が物に。すれば所を追出す。地都で別れし妻や子に逢はうと思ひ是迄は出ごととは出たが。詞先づ北國へ行て働かうか。東國方がよからうかと。地取つつ置いつの心は那智黒。磨きかねたる性根なり。地色かゝる所へ何國とも逸矢一筋飛び來り。小松の枝にはつしと立つ。はつと五右衛門打驚き。此蘆垣のあなたに鹿狩。さては逸矢か長居はならずと。行過ぎしが立留り。何か暫く思案して立歸りて彼の矢をば。引抜き取つて足早に。 フシ來た道後へ駈け戻る。地色狩場の方より髭奴息を切つて馳せ來り。逸矢尋ぬるうろ／＼眼。其處よ此處よと草叢を搜し廻る フシ跡よりも。地色友傍輩が息やすめ。煙管くはへて。コレサ是非内。詞何をきよろ／＼しめぐる。お仕着せの襦はもはや蹴込んだか。コレサ／＼。はてこな者何落して何尋ねる。イヤ何も落しはせぬ。若殿のお矢が知れぬ。汝も共々尋ねてくれ。それが尋ねに及ぶ事か。若殿のおやは都三位中將様。手前のお屋敷へ御参

子にお出でなされ。今の親なら我々が旦那。ハレ狼狽者め何馬鹿つくす。見えぬは鐙のお矢さ。かぶらの親なら大根の事かと。地どんな聞人と口下手が、フシ争ふ所へ。ハルフシ國の世繼の。若緑。地まだ十六の角丸／＼跡に付添ふ諸侍。御傳役の當馬を始め。御休息の其間風景御覽と床几を直し。フシ傳き申せば。地若殿は逸矢の見えぬに御心を痛め給ひ。詞いかに方々。昔義經八島にて。弓を浪間に取落し。小兵を敵に知らせじと海へ飛入り取返し。恥辱をかくし給ふとや。地我も其矢は惜しからねど。里の農人拾ひなば腕固らずと笑はれん。面目なやと年よりも恥を知つたる御一言、フシいづれも。感じある所へ。地石川五右衛門老母と見えし手負をいたはり。物哀れに打萎れ。ちとお願ひと間近く寄り。手をつかへ頭を下げ。詞某めは隣國和州浪人。身貧に迫り一人の母を伴ひ。都方へ助力を頼みに參る此道。何者の業にや。遠矢を射かけ。母が肩先を射抜く。早速抜き取り保養致し候へども。地次第に弱る老の急所。せめて息ある中に敵を取つて見せ申したく。心は彌猛にはやれどもいかなる者のわざとも知れず。詞御弱年なれども。此國の太守と見受け御訴訟申す。あはれ御威光を以て御詮索乞ひ願ひ奉る。地色則ち證據は此一矢と。差出す矢こそ最前の。射損じ給ひし白羽ぞと近習外様も打驚き。若君はつと思せども。さすが一國一城を治むる器量備つて。其矢是へとお手に取り。詞敵を顯し母の怨を報せんとは。ヲ、天晴の志。最前逃げ行く鹿を射損じて。過せしは某よ。地イザ立寄つて遺恨をはらせ。相手になりて取らせんと。さも潔く宜ふにぞ。人々手に汗握るばかり。フシ事こそあらんと身構す。地色五右衛門御顔つく／＼詠め。詞梅檀は二葉と申すが。ハアア御威勢といひ御器量備はる御一言。見る影もなき素浪人が詞を立て。地色相手に成つて下されんとは分も立ち心もはれ。お恨申さんやうもなし。詞コレ母人。今のをお聞きなされたか。敵といふは此國の城守。我々しきが相手とは勿體なく恐れあり。地言ひがひなき悴を持ち。貧苦に迫る其上に。あへない最期とさぞや無念に思されん。詞せめてこなたの心晴しに。冥途黄泉のお供を致し。死出三途を負ひ奉らんそれで腹をめてたべと。地座を占め覺悟と見えければ。若君驚きアレ留めよと宜ふに任せ。御

傳役の當馬之丞つかゝと立寄り。詞ヤレ逸り給ふな御浪人。御心底尤もなれども。見れば僅かな淺疵。保養を加へ給ひなば。よも命に別儀あるまじ。生死も知れぬに追腹とは近頃危忽と。地言はれて暫く差控へ。面目なや其保養致す方便があれば。相果てうとは申さぬ。詞今日を立てかね。母を他門へ預けに參る程の儀。何とて介抱フシなるべきや。地色さあればとて現在親の今は手疵。他所に見なしてゐられうか。心底の程御推量と涙にふるふフシ聲音に泥み。地色御用金一包挾箱より取出し。詞近頃悔りがましいが。貧苦に迫るお物語お笑止に存じ。母御の手疵養生代。地些少なからと差出す。詞ヤレ情なき御差配。身不肖なれども以前は懸鞍にも腰を掛け。錆鏝もつかした某。金銀を食れば斯様に身貧は仕らぬ。お眼識が違ひました。地近頃仁體に似合ずと立派な詞に猶押返し。詞そりや一概の御了簡。一國の掟にも。過料を以て誤をゆるす。是則ち若殿の。誤をふせぐ過料金。申さば僅か五十兩なれども。若殿は堂上方より此國へ御養子。某親の名代としてつき來り。まさかの時の御用にもと貯へ持ちしお枕金。則ち金役の名判かけ屋の極印。地さもしき金も出所は一天の君の御座所。堂上方より出でたる金。御拜領も同然。詞一つは若殿のお心も休めるため。御受納あつて給はれと。地事を納むる詞を幸ひおつ取つて押戴き。詞拜領とあれば身の面目。有難しと受納致そか。ハテそこに御遠慮無用。但し些少なかな。コハ勿體ない。左様なれば大悅。地色只此上は老母の介抱專要と。立別るれば若君もコリヤゝ浪人。詞我が誤を償ひしは事穩便の爲なるぞ。汝が力と思ふなと。地仰かしこき道草やフシ露踏み分けて出て給へば。地色當馬之丞も心得ぬ浪人者と見ながらも。殿の御名を大垣の。内に籠めたるいかゞ崎。オクリ目かどを付付けてフシ立歸る。フシ後見送りて。地色五右衛門は金懷に取納め。あたりを見廻し手負の傍。立寄つてコリヤ婆。詞首尾はよいぞ早起きろと。地言ふよりむつくと蚤取眼。目を光らして。詞お侍様味ようしやました。どれ分口。地下はりませと手を出せば。ヲ、大儀代取らせんと。鳥目貳百投げ出し。必ず外へ沙汰すと言ひ捨て行くを引きとどめ。詞コリヤ何でえすぞ。五十兩の割前を。どてまたとはラけうこつ。お目出

たいを圍うても是程は暖る。心よう寢てゐるを矢の根で肩先突き破り。目の眩ふ所を金々と。地金で性根をつけさせ。俺がするやうにせいなれと。成つてゐたので五十兩。茄子わけても有りやうは。痛い目しただけお負てえんす。詞これなしの目くさり錢。地いらぬでござんすと。フシ蹴返せば五右衛門むつとし。詞ヤイ乞食婆め。菰を脱して下著を着せ。酒くらはして血走せ。腹ほてさしたが大きな貧。まだ其上に五十兩の扱ひ金半分取るとは。テモ横着な老耄め。イヤ人に疵付け其貧を。一人して飲まうとはテモ恐しいお侍。我が。こなたが。おのれがと。地詞あらして割り打ちを。やらじ取らんと。フシいどみあふ。地色婆は初手より物だくみ。一味を拵へ置きたるか。小屋の者共皆来いと。呼る聲に五右衛門も南無三寶と飛びかゝり。取つて引寄せ心もと。ぐつと突込み。フシ一えぐり。ヤレ人殺しと最期の大聲。餘さじ遣らじと乞食仲間。てん手に棒杖釘打竹。騙りひろいだ侍を。叩き萎せぶち殺せと。喚いてかゝれば八方微塵論に及ばず切りなぐる。一方襲げば一方から。群りかゝるを立割。梨割唐竹の。斜に殺がれて逃ぐるもあり。村の番太も役人も。加勢をすれど叶はゞこそ。秋の木ノ葉。と散り失せて。残るは石川鐵石。フシ五右衛門。地騙り取つたる五十兩。小判の耳より人の口。萬々兩とも言ひ囁す。千が萬とり百が千とり。五十歩逃げて百歩をば。飛ぶも一飛び一息に船場を。キホヒ指。してぞ三重いそぎ行く。二上り歌里は名高き。ギン都の富士と筋向ひ。色をたてぬき島原三筋。よみのこんだる。ナホスフシ遊女町。地爰に流るゝ瀧川が今日浮草の根引とて。常より早き揚屋入。おくる遣手の鼻さへも。フシ燕尾屋にぞ入りにける。地色主の傳六忙しげに。詞エイ瀧川様が待ちかねます。夜前人を上げます通り身請の埒をなされんとて。平様はお國より昨日大坂迄お着き。お藏屋敷の御用をしまひ。すぐに夜舟で上らんとのお飛脚。それ故お前の親御の方へも。今朝早々から人走らせ。是もやんがてお客も追付。すりや肝腎のお前の方へ。使業ては心元なく。おきにお馬と出かける所。お顔を見たて。先づ落着く。サア〱奥へイザ奥へと。たくしかくればヲ忙し。詞今朝から早うとお使なれど。昨夕聞いて今日の事。地色親方への附屬傍輩衆との暇乞。何かに隙入り遅な

はつたら免してと。ねぢられてイエ／＼。調遅い事はござりませぬ。呼びましておけとの御狀所をひよつと間違うては私が無念と。お目玉を貰ふがいやさ。堅苦しい田舎侍。地町の粹とは違ひますと。言へが遣手がヲそれ／＼。調廻りがようても揚銭の外。一文散らさぬ呑ん坊。後の登に前垂の染貫いうて見たれども。いつかな事すつとこなでお歸り。地あんな吝い侍は。島原へ出かけずとも。皺腹切つて死んだがよいと。識れば亭主がコリヤお杉。詞あの氣でも見ん事身請今日まんなら無手でもあるまい。なんぼ吝くとびん水入の。そこらは鼻が口車。地廻しかけるぞあてにしや。ヲツトそんなら川さまと園の間で飲みかけう。執成いうてくれなされ必ずや傳六さん。忘れまいぞと念押しと奥へ入ればヲ、いかに。萬は我等呑み献立。しまうて取らんと傳六は臺所のフシ板本に。ヤアえいとこ鯖冷し物。何から正銘房信の。薄刃追取りちよき／＼ちよつきりきり／＼切り刻み。フシ人の氣をとる料理かた。地色酸いも甘いもくた者が知つて付込む瀧川が。親の惡者三三五郎兵衛。娘の身請をあてにして伴ひ来る負せ方。置土の九郎次とて低みを埋めて歩をわせる。日廻し金の忙しなうコリヤ五郎兵衛。詞金を濟す當があると。島原三界此様に。引きずり廻つてどうするのぢや。見ん事われ濟すかよ。ハテ濟さいてよいものか。豫て咄した娘が身請。今日埒する筈。廿兩や卅兩は祝儀というても取り易い。地利足揃へて急度返辦。氣遣ひのきんの字に。長點かけて貰ひまじよと。憐な詞に九郎次もにつこり。詞ヲ、さうなうては叶はぬ筈。胴金の根城損かけうとは思はぬ。地間違ひのないやうと。念に念おす詞を返し。詞ハテ高の知れた貳拾兩。穴一倍はつても濟めかねぬ。どんと仰しやる事はない。地不承ながらちつとの間。爰に待つてと燕尾屋の。中戸口に九郎次を待せ。つゝと通つて。詞エ傳六様それにござりますか。今朝程はお使。姉めが身の上段々お世話。首尾なりまして私も。金の緒に取付きます。サレバ／＼。娘御が出世の片付。其許にもよい入前。地瀧川様も今來てなり。お客も追付見えませう。見ればお通もありさうな小座敷が明いてある。酒でも參つて待たしやませ。詞申し表の。此方へ入つてお休みなされ。地然らば御免とフシ内に入る。地五郎兵衛

も落着顔。詞娘に逢うて待合せお客にもお目にかゝり。ちよつと咄す用事もあり。地其事に付きこの連衆。臺所にゐりや結句お邪魔。片脇の小座敷をそならいつそ御無心と。九郎次を伴ひ煙草盆。フシ提げて一間に入りにけり。地色はたゞハルフシ心の外や。瀧川に戀ぞ積りてふちかたを。金に束ねて身請する。平の平平常ならぬ速に危き石川五右衛門。フシ跡に引添ひ入来る。地亭主は矢庭に飛んで下り。そりや平様の御登り。御出の御筋。先づ川さまへ知らして呼出せ。ヤレ目出たい／＼と。鳴りまはれば瀧川もフシ遣手引連れ立出づる。詞これ／＼御亭主。イヤサあまり其様に仰山さりととは迷惑。馳走になりには參らぬ。瀧川殿を請出すばかりの上京。扱此お連は牧方より同船の御浪人。夜がな宵とお咄相手。殊に船中の間船上より是までイヤハヤ仰山御懇意。お心遣ひの返禮旁々。ひらにとお供して罷越した。地御酒一つ上げておくりやれと。挨拶すれば五右衛門も。態々詞をやはらめて。詞こりや御亭主初對面でござるよ。拙者は此近郷にそといたした浪人者。見らるゝ通り長髪。養生の爲大坂へ罷越し。夜前歸る乗合にて四方山の咄がしみ。連があれば三里とやら。お誘ひに任せ立寄り申した。承る様子がお傾城を請出さるゝ由。何とやら羨しい。歴々の御身上に肖り。地珍しい廊酒。病中の憂さばらし一つ食べて歸ろかい。詞コレハ／＼有難いお詞。ガ此廓始つての燕尾屋。初對面とはちとお恨。御長髪ではござれどもお達者さうなお産付。盗人に見せても御病人とは申すまい。地先づ平様と奥座敷へ御同道。それお盃御膳の用意と。騒げば平平ア、是さ／＼。詞其心遣ひ仰山困り申す。かう參る道。かの藤の森にて一膳蕎麥。あなたも拙者も仕度ば仰山よくおぢやる。夜食がほしくば乞ひ申さう。例の豆腐のぐつ煮に冷飯。イヤモそれが仰山御馳走。御浪人も病中とあれば食養生が肝腎。最前も言つた通り。料理食べにはるゝとは參らぬ。今日は君が身請の一巻。外の事は費へ費へ。先づ契約の金渡すべし。地小判といふ物見せうかと。猫に鰹の五右衛門が。鼻のさきにて二百兩取出して封押切り。詞先達て渡した手附が四十兩。今百十兩都合百五十兩。是て身の代買懸りの借金ぐるめ。地何かの作略皆済とよみならべ。残りの金に又封しつかり肌につけ。

何ぞこれ川殿や。拙者は御覽ある通り。大切の金仰山出しての心中。其許にも金の冥利。我等を随分大切に。可愛がつてくれめせと。地いふも笑止さ瀧川は。フシいと轉さ。増りけり。地色傳六は金受取り。詞いかにも是にてさりと落着。お金をわたしは親方へ。すぐに持参し證文取つてお渡し申さん。地こゝは端近お座敷へ。お連様にも御退屈。コリヤ女子ども。お鮎子く其てうしに。乗つて身請の埒せんと。ハズミシ勇み進みて出て行く。地平平も機嫌よく何さま奥にてゆつくりと。打寛いて御酒飲べん。御浪人いさごされ。皆款待せと先に立て。跡に残りて仲居を招き。詞お身にちと頼み事あり餘の儀でもない。是の亭主が仰山馳走ぶるが肝にこたへる。肴には梅干生姜味噌がよいぞや。そなたが氣轉てついざつと。地いふに領く悪じやれ女子。詞アイくそれ座頭と仰しやる。次手に舞子といひ捨て。地呼びに走ればア、是々と。留めるかひなき當惑の。フシ折へ出かける三三五郎兵衛。揉手して小腰をかゞめ。詞私めは瀧川が親。三三五郎兵衛と申す者。此度娘が身請をなされ。國へ連れてござる由。末頼みにいたす一人のかゝり子。一緒に引越し同道せんと存ずれども。急な事故跡より發足。それに就き方々の算用差引き委細は追つて。先づ當分入用の金三十兩。地御合力下されよとフシつまんだやうにいひ出せば。地色平平ぎよつとし。詞何ぢや小判三十兩。アノ只くれいか。瀧川こそ請出しに來れ。お身がやうな白髪親仁。請出しには參らぬ。それに何ぢや親だ。親が定なら樽有で。歴きと禮もいふべき筈さ。無心いふ親いやだぞ。牛やら馬やらこちや知らない。アラ勿體ない。いやだぞ。くくくと。地七里結界跳ね飛ばされて。こなたも唾みの性根をあらはし。詞コレお侍。嫌がられても瀧川が親。娘を請出し女房にされば親の高家。國へいて大きな顔してかゝらにやならぬ。ア養うて貰はにやならぬ。イヤぞんざいなる棒手振め。あはれ國へ來て見らう。地ヲ、行て見せうと争ふ所へ。勇みにいさんで主の傳六門口よりかさ高に。詞サアく埒が明いて來た。コレく平さま。是が則ち川様の年季證文。右の外に一錢の掛り合毛頭無いと申す一札。出口への斷りも濟んだれば。地御勝手次第何時でも。手を引合うて大門をお出なされと。

フシ形を渡せば。地平平受取りコリヤ見たか。詞外に一錢も掛り合ひ無いと潔白の證文。是ても三十兩よこせか。イヤ養へか。一粒一錢鑊半文も罷りならぬ。言分あらば親方へ行て言へ。國へ來せたら枝骨切つて切折るぞと。地切双廻せば亭主は呆れ。詞マア〳〵お待ちなされ。思ひの外な御機嫌。エ、こりや親仁殿が。初對面から御無心をいはれたと見えた。早いぞや。歌〳〵コレ親仁。詞通路も使ひも並んでなし。跡からも言はるゝ事。旦那の御腹立御道理な御筋。御馬は我等がつないだ〳〵。地機嫌なほしは奥の間で。歌三下り騒ごぞや。合〳〵コレハイノお腹立てられずと酒事にして。人の羨やむ。しなだれ姿で痴話。事ならば。こちや。〳〵〳〵見ぬ顔えワイ〳〵。オクリ押立てへ奥に入りにつけり。地色跡に五郎兵衛胸算用九三がさんでぐわらりと違ひ。フシ五ざん上つてゐる所へ。地色見一むほうにせがむ九郎次。のつさ〳〵とのさばり出て。詞サア約束の金いたそ。受取る渡せとフシせがみ寄る。地色又間違の詫言を。言ひだせばコリヤ言ふな。詞あてとは今の侍か。あの筋では明かぬぞよ。地べん〳〵がらりとつられてか。弱みを食ては九郎次が立たぬ。詞てんがう仲間へ見せしめ。金が濟まぬと眞裸體。菰被らすがせめての腹癒せ。ささつたわんぼ抜け親仁と。地素首取りて引寄すれば。借手も惡者持つたる腕挽ぎ放し。詞何とすりやこりや剝ぐのか。汝腕先で金取るか。五郎兵衛も男。地取られうなら取つて見よと。嗤みかゝれば堪へぬ一腰。すらりと抜いて刀背打と。振上げかゝるを引外し。又打つ腕先しつかと執り。させぬ〳〵とフシ互の力み。地色柄一本に腕四本。振合ひ揉合ひ張合ふに。三三は脇差腕取る拍子。九郎次が肩間へ切先の。ちよいと觸ればばつと血煙。詞サア泥棒めもう聞かれぬ。金も濟まらず切つたぞよ。代官所へ斷つて汝をどうする覺えてゐよと。地喚りながらに駈出すを。それ斷らしてよいものかと。飛びかゝつて後袈裟。切られてのつけに返返るを。聲立てさせじと疊みかけ。切りさいなまれ血みどろちんがいの。のたくり廻つてフシ息絶えたり。地色瀧川は座敷の隙何心なく來かゝりて。かくと見るより走り寄り。詞ヤア父様こりや何事。討果して死ぬる氣か。地ナウ悲しやと取付いてスエ歎くを聞いて。詞ヤイ〳〵娘聲立てな。討果す

のでなんのあろ。高は先刻に咄した金。遅なはるが曲事と。是を抜いて刀背打に。かゝるを腕取る怪我のはずみ。俺や切りはせぬ己がでに。切れをつたに紛ひはない。地後日の言譯汝してくれ小さい時から養うて。賣つて置いたもまさかの役。こんな所が親孝行。怪我ぢや〜と色顔變じ。フシ命を惜むうろ〜眼。地色娘は悟つてコレ父様。詞其言譯も證據もいらぬ。ハテ見た者は私ばかり。このまゝ捨てゝお歸りあれ。地人が知つては詮がない早う〜と迫立てられ。顔色なほりてヲさうぢや。詞汝さへいはねば知人はない。事濟む迄は影をかくし。追付國へ行て逢はう。地其時必ず孝行に養はれねばならぬぞよ。侍にとつくりと吞込ましておけ合點かと。まだ身の慾をいひ捨てに。オクリ跡をも見ずして逃げて行く。ハルフシ影見送りて。瀧川が硯引寄せ獨言。詞見す〜人を殺めながら生延びんとは愚痴未練。無理と思へどさながらに娘の口から恥しめて殺しもならず。フシ落せしが。地詮議かからば忽ちに憂目にや逢ひ給はん。ギンとても我身は請出されあんな男に一生を繋かれるより親のため。我が手に掛けしと書置し自害するより外なしと。思ひ極めて涙ながら硯の海に筆濕す。心細さと悲しさと。詮方なさを取交せて。身を悔みたるギン忍び泣き道理。フシせめて哀れなり。地色岡目に見かねる石川五右衛門。横合より瀧川殿。そりや書置して死ぬるのかと。地聲かけずつと立出づれば。ハツト思へどせかぬ顔サア私も今日より武士の妻。不義いひかけし相手を殺し。我が身の自害は夫へ言譯。地見のがし死なせて給はれと捨てたる拔身取る手を押へ。詞ヲ、其通りの書置と思うた故にとめるのぢや。俺や最前からあれにゐて。こなたの親仁が手にかけて。墮落したのも知つてゐる。エ、イヤサ驚く事はない。親に孝行なこなたを。死なすが惜しさに助けに出た。身請の客に眞實を立てる氣でもなさうな。すりや死ないても濟みさうなもの。其仕様は平平に俺が逢うて死骸を見せ。ころりと騙す思案がある。地俺に任してつい爰へ呼出して遣さつしやれ。氣遣ひなしに濟してやろ。詞ナニあの平平をお前に逢はせば。さらりと事が濟むかへ。サアそこには深い仕様があるてや。地ム、ン世には頼もしいお方もあるもの。もとこの原因もあの客があた害いから出來た

事。騙^{だま}してなりと嫌^{きら}してなりと。ならば縁も切つてほしい。呼出して済む事ならおつとまかせとかい立つて。女心に何の氣も。なくと笑ふとふりかはり。フシ勇んで奥へ走り行く。地色五右衛門は手を交^あへ立ちはだかつてある所へ。平は千鳥足。ちろくめかどは強き酔^よどれ。詞コリヤ御浪人様め。手のわるい。盃を差捨てに座敷を外^はいて何御思案。拙者を爰へ引^ひずり出してなんでえす。三二とやらさり荷^にとやらが。御挨拶なら嫌^{きら}でえすと。地ひよろつく足元死骸に躓^{つまず}き。こりや何ぢやと吃驚^{びっくり}するを抜打ちに。胸板^{むすぶ}かけて切付くれば。コハ狼藉とすらりと抜く。右の胸^{むね}を肩口より打落されてうんとばかり。倒れ伏すをつだく^くに斬ればそこらに流るゝ血汐。瀧川駈出てヤア是はと。いふ聲も出ずわなわなと。フシ顛^{あや}ひ戦^{たたか}くばかりなり。地色五右衛門鎮めてコレく。詞かうしてしまへば誰が見ても喧嘩。相手向ひの討^う果^はし。外^{ほか}へ難儀は少しもかゝらぬ。地合點かと吞込ませば。いかさまさうと胸落着き。ハツア有難や。忝^{かたじけ}や。命の親と手を合せ。後々迄も此事を沙汰遊ばして下さるなと。スエ頼む詞に。詞合點がいたか。こなたも俺も見す知らず。いは他人のふりがかり。よその事でも切人^{きり}は某。互に大事はいはぬづくとばかりでは氣も休^{やす}るまい。爰が談合なんと氣遣^{きぢ}げのない様にいつそ二人が女夫^{おんな}になろぢやあるまいか。すりや女房の親の科。夫^{おつと}が言はう筈がない。地氣が休つてよかるがのと。理詰^{りづ}は耳より傍^{そば}に寄り。詞どうやら談合のなりさうな事。したがお前にお内儀さんはないかへと。地念を押されてイヤくく。詞女房子もあつたれども。ちとした事で七年以前生別れ。今は鰥^{おん}の一人住^{ひとり}。地色んなら持つて下さるすか。ハテ持たいてはと戯^{たふ}れて忙^{いそ}しき中にもひつたりべつたり。抱き締めたる縁結び。フシ深き妹脊と成りにけり。地色五右衛門やがて平平が。死骸の肌へ手を差入れコレ。詞是がそなたの年季證文。地金は俺がと小判を引出し。押戴いたる目つき顔付。不審はれねば是申し。詞此手形は聞えたが。其金お前は取る氣かえ。取るとも取るとも。此金故に付きまとひ二百兩を取る首尾なく。九十兩ではあはぬ仕事。ヤアすりやお前は。コリヤ男の悪事を女房の口から。言ふな黙れと肌につけ。ヤレ喧嘩よといふ聲に。家内が騒げば近所となり。どさくさまぎれ夕まぐれ。

中 之 卷

ぐれの來ぬうちサア來いと。走り女夫が手を引いて出口へ。こそは 三重ハ駈けりゆく

地武士は人目に高楊枝柳の馬場に浪人の。表美々しく内證は。女房と見えて下女ぶんの。連れ子をすぐに丁稚ぶん去年生んだる子のあひが青田に變る夫婦仲。フシ世に睦じく暮しける。地色主は近所夜咄しに出行く月も四つ過。妻のおりつは乳のみ子の宵寢の膝を休めんと。表間近く立出て。詞コリヤ五郎市よ。坊が枕を持つて來い。腕が抜けるヲしんど。地ころりさそうと下におく。兄は十一年だけに申し母様。詞旦那様もお留守。表は締めてござるかや。ヲ宵から錠をおろして置いた。昨夕もお客で夜通し。地今夜轉けたら他愛はあるまい。何時お歸りあらうも知れぬ。それ迄おれは爰に假寢。詞そなたは奥にお寢間もして。煙草盆に火もいけ。裾に物置き轉けてあや。地ろくに寢る時起きそぞと。いひつけやつて乳のみ子の寢んねの伽のころも。二夜越しの草臥に。オクリ思はずへ深くフシ寝入りける。地色時は亥も過ぎ子にうつり牛より黒き夜盜の一族。石川五右衛門三上の百助。足柄金藏。片田の小雀。小鮎の源五郎引手して。此家をめがけ門の戸を。しやくれど堅めし錠鑰五右衛門制してさなせそ。詞強きを破るは變のもと。戸尻の壁を切破り。自由をさせんと兩双の双。地ぐつと突込み引廻せば。練磨を得たる手の内の。ぎしつく音もあらばこそ。コハリ三尺四方に切破り。内を覗ふ竹飄簾。がらつかすれどフシ寝入りばな。地色とつくと見すまし小聲になり。詞首尾は上々さりながら。心にくきは見かけと違ひ。見込のなき内の様態。殊に女が枕元。守り刀を置いたるは。浪人者と覺ゆるぞ。フシ油斷して先とられな。地小鮎の源五郎先にたて手に合ふ物を持出せ。あながち重きを徳とすな。輕きといへども錠前の。ギンおりたる物にはこうみあり。寅の刻より一陽萌す陽は顯はれ陰は隠る。今は丑三つ時分はよし。時刻うつすな急げ。詞それ。壘の縁を踏み。上敷につまづくな。地ハズミ驚の。足どり

それよく透し詠めて下知をなし。我は女が枕元目を。さまさは一討と。鎧元くつろげ待ちかけしは危くも又恐ろし。ハルフシ教に従ひ。徒黨の面々。江戸着替の半櫃挾箱。金引出よと私語いて持出づれば。ヲ、出来いたく。跡は某見廻つて引包めて立歸らん。お身達先へと追歸し。一人残つて奥の間へ。オクリ不敵に何も又忍び行く。ギン正直は。ハルフシ子供にたとへ。目にたとへ。地寝足ればいつと時知らず。目をさましたる稚子は。ホフシ添乳の肌を這ひ出でて。機嫌遊びのフシ折からに。地色五右衛門葛籠背に負ひ。出づる姿が氣に入りしか。手招き足ずりにこくとフシわらふ笑顔の愛らしさ。地色人を剃ぎ取る邪慳にも。ハテしをらしやいたいやと。思はずも立留り。我七年以前都追放にあひし節。離別せし女房に預け置いたる稚子の。面ざしにさも似たりと。子を持ちし身はよその子の。愛に引かれて愛しかり。オドリ柏子何がお氣参つて。てうちくしやる。ヲ、ヲ、ようしやる。笑ひ佛に笑はしよしと。地我を忘れて餘念なく。背負ひし葛籠振廻し。オドリ柏子つぐら負うたが可笑しいか。こはい伯父が嬉しいかと。地踊る疊の足音で。添乳の母は飛んで起き。詞ヤ汝や何者ぢや。何處から來た。地盗人さうなと我子を一問へ押遣つて。守り刀を掻込めば。不敵の五右衛門胸をすゑ。詞俺や何處からも來ぬ。外から來た盗人ぢや。聲立つると捻ぢ殺す。ヲ殺さるゝとて主の留守。白紙一枚盗られても言譯たぬ。背負うたつぐら置いて行け。イヤならぬ。地ならぬと是ぢやと突つかくる。利腕苦もなく引摺み。詞おかさま。盗人にはひり。子を愛してあると性骨。こなたの手には合ひ難いと。地双物腕取り顔見合せ。詞ヤ汝や女房のおりつてないかと。地頭巾を取れば以前の夫。詞五右衛門殿か。ホイ。地はつとばかりに胸迫りフシ心も空に詞なし。地色五右衛門も面目なさ。うちくそろく片傍へ。背負ひし葛籠おろす内。主の浪人夜咄より歸る表の間の壁切つたは如何にと差覗き。様子ありげな内の體。そつと這ひ入り庭陰に忍びて様子を窺ひる。地色五右衛門詞も差足に。詞久しう逢はぬにまあ壯健で。そうして爰にはどうしてぞ。あぢな所で逢うたのと。地問はれて女房詮方なく。あぢな所であぢな出合ひ。顔見て私も胸がふくれた。詞ソレ覺えが

ござらう。都御追放の節。自らには暇いとまの状。五郎市は預けると。くれ／＼のお詞。地大事と思ひ四五年も辛抱は
 フシしたれども。地色何するすべも女おんなの手業。爲なん方盡きて此家の奉公。詞五郎市は丁稚ていぢぶん。私はアノ子を生んでか
 ら。マア下女ぶんのがてら奉公。地それはさうぢやがお前は以前の氣もなほらずいよんな商賣。そうして今は何處に
 ぢやえ。詞どこは久しう故郷へ歸つてゐたれども。物が見えぬと五右衛門と又してもどやをもむ。兄めが顔も見がて
 らと上りのほごとは上つても。都の内へは足踏ならず。やう／＼大津に足を留め。知らぬ呉服商賣より知つた小糠商こぬかあきなひと
 まあ手なれた事をしてゐる。是といふも子の無い故浮世壹分五リンの暮し。そなたに逢ふたら兄めを取戻し。外の商
 してみる氣。勿體ない事ぢやが此商賣にもほつと飽いた。五郎市を戻してたも。ヲ、戻しませうさりながら。今は此
 家の旦那殿。親やら主しゅやら義理ある中。其留守の間へ家後切。盗人殿が入られて。それが即ち父親てとせて。五郎市を戻し
 た。私が口からどうもいはれぬ。表向おもむきから晝中に。迎ひにこんせ戻しましたよ。ハテこな人は。晝中に京へ來ると又
 むらへかまれる。旦那殿へは駈落したというて。今夜幸ひぢや連れて去の。イヤさうはなりませぬ。ならざいつそ盜
 んで去のか。盜ます事は。サならずとどうぞ。インヤ。はて。なりませぬ。エ、面倒な女め。地五右衛門が連れ歸る
 に誰が點てんを打つ。引連れて立歸るとクシ奥を目がけ駈入るを。地色主庭より飛んで出て。素直取つて引戻し。立塞れ
 ばおりつは吃驚きつこうひよんな出合とフシ氣をもがく。地色五右衛門苛いらつて。詞ヤ汝おれは此家の主ももよな。俺が子を俺がてに。
 連れ歸るを。地邪魔するかと。掴みかゝるを確しつと止め。有無をいはず引擔ひかぎ。投げんとすれども此方も曲者くまもの。身
 を驟はなして振解ふりぎき。取手柔道の早業はやわざも互たがひに外うし落りあふ。傍そばではおりつはあぶ／＼と。いづれを押へいづれをば制し止
 めん様もなくフシうろつくばかり急せくばかり。地色後は互たがひに髻こめ髪かみ掴み合つてどつかと坐し。息も切れるれば主は聲かけ。
 詞それ女房水一つと。いふに此方もコレおか様。慮外ながら俺にもと。地こはれて胸は氷水フシ解けぬ思ひぞ切せつなけ
 れ。地色主は怒の聲あらゝげ。詞汝盜賊おれ今宵ばかりと思ふかや。いつぞや美豆野御牧みづのりにて。騙り取つたる五十兩。多

くの人を切殺し立退いたる重罪人。地縄掛けずにおかうかと。思ひもよらぬ一言に。五右衛門ぎよつとし持つたる誓
 掬ぎ放し。詞ムウ。其譯知つた貴殿は何人。ヤ何人とはと抜き放すマ、マ、く待つたく。其金は扱ひ金。騙りのわ
 けを知つたは如何に。ヤア吐かすまい。割内やらぬ腹立に。一味の非人が訴へ。某こそ其時取扱ひし侍當馬之丞。見忘
 れたか愚人め。騙り取られし越度により。知行に放れ此所に逼塞。地汝が首取り再び歸參の願ひをする。フシ覺悟ひ
 ろげと詰寄すれば。詞ヤレ逸るまい。尤もく。何と其金五十兩。お戻し申そが御了簡はあるまいか。ヤア狼狽者め。
 其金は若殿のお遣ひ金。則ちお里の金役人。岩木兵部の名列をすゑ。かけ屋の極印明白。外の金で事すめば。其時調
 へ返納する。今更拵へ首代とは。卑怯者めと言はせも立てず。イヤ今更ならず。其時の金返辦申すと懷中より。地取
 出し投げ出す五十兩。包の封印其儘に嚙み持ちしはフシ不思議なり。詞ムウ合點のいかぬ。扱は汝は榮耀にひろく盜
 賊な。貧苦に逼り盗みせば。今迄此金持ち時よう筈はなし。地軍々の科人と。極付けられて眼を瞬き。詞榮耀にす
 るとはお情なし。地心ある御方と見こんで恥を明し申す。詞必ず他言御無用。もと某は。腹からの盜賊にもあらず。
 則ち其金の上包に。金役岩木兵部と。判形すゑたは某が實の親。ヒヤア。フ、おりつも此儀は知るまじ。いかなる事に
 や三つの時。此一腰を相添へ。伏見の野はづれに捨てられ。河州石川の百姓に育てられ。人と成つて都へ上り。心懸
 黨ゆゑ邪人仲間へ入込み。意に所を追拂はれ。又故郷へ歸れども足も留らず。御自分を騙りしも。何とぞ其金にて
 武士にも思つた時は本心。騙り了せ上包をよく見れば。岩木兵部と父の名銘字。封じ目にしつかりと魂の判形。
 地いかに盜賊すればとて。現在親の魂を。切裂く事も勿體なく。幾度か手は掛くれども。ギン名判に恐れ只今迄。フシ堪
 へ堪へて貯へし。地色佛體受けし人間の本心實は變らねど。貪慾邪智の上疊り。はれるは臨終今はの時。それ迄待た
 ず當馬殿。本知にかへる種ならば首とり給へ惜しからずと。近付き寄りて差付くる。侍勝の根性に。フシ盜賊さする
 は惜しかりし。地色始終を聞いて當馬之丞。詞ムウ岩木兵部殿の御息。稚き時は友市とはいはざりしか。ハテよく

御存じ。ヲ、存じた筈。拙者は江州より兵部殿方へ養子に参り。若殿に付き美豆野お館へ奉公。ム、すりや親々はひとつか。いうて見れば行合ひ兄弟。アノ御自分と。ヲイノ。地是はとばかり手を打つて、フシ呆れ果てしが。地色當馬之丞何思ひけんすつくと立ち。刀すらりと拔放し。手水鉢に打ちつけ。打ち折つてからりと捨て。詞誠に鳩に三枝の禮あれば。鳥に反哺の孝あり。盗みはすれど親の事。忘れぬ性根あつばれ。其心に免じ當馬之丞武士を捨て今日より町人。ソリヤ何故な。なぜとは。武士を立つれば御自分の首取らいて先知へ歸られうか。親兵部殿にも。御存生にて折ふしは仰せ出され。此友市は何とした。太刀錆びになる相ありしが。佛神の加護あつて。人並に生立ちしかと。老體の病身は苦になされず。地御目の内に涙は幾度。詞何とぞ本心に立歸り。御健勝の内御對面あれよ。地性根の直らぬ内は某とても音信不通。お歸りあれこれ限りと立上れば五右衛門は。親の堅固の嬉しさと侍捨てゝの恵みに退つて三拜。フシおりつも嬉しく。地色永居は無用と引立つれば。小腰折りく折あらば。此お禮をといふしに。差詰めたりし門の戸を。開くるおりつは事なき内とフシ心急きたつ主は見ぬふり。詞コリヤく女房。盗みにはひりおめおめと。手ぶりで去んでは本意なかる。何によらず望の物やつて去なせよ。ア、申しそりやあんまりお情過ぎる。見れば諸色も餘程不足。ヤレそれは高の知れた浪人の貯へ。何惜しからん。まだ其外に。心のなほる絆足。二人が中の。ナ。子盗み。地さして去なせいと氣を付けられてハツトばかり。やがて五部市呼出しフシ手渡しすれば。いとど尙嬉しさがぎり涙ぐみ。重々の御恩何として報せん。手を合すれば其恩は此。子盗みを元手とし。商賣替へて見せられよと。深き情の教訓も。縁にひかるゝ友綱や末は。首枷首綱と。知らて伴ふ。ギン子盗の闇明け方。近く三惠別れける。ギン針に引かるゝ糸筋や。廓を。出でて五右衛門が妻と定まる瀧川が。素人の業を仕習うて。フシ洗濯物の縫くゝり。フシ忙しき中へ五郎市を連れて戻つて繼合す。親子の中のそぶくは。絹の表に晒裏。フシ肌つき悪く暮しある。地色來る人毎に惡者の。三上の百助堅田の小雀。遠慮もなくずつと入り。詞エお瀧さま縫仕事。御精が出

ますの。コレハ二人づれてようこそ。主は晝寢。地何ぞ用ないひ置いて。詞イヤ用というて商賣づく。コレ此小雀が在所。堅田の落鴈屋に嫁入があつて。しつかりと土産。躍りこむ相談に暮方から金藏所へ寄合ひます。拟と。雀よ。次手に今のをいぬか。汝いへ。ハテ言ひに來たぢやないか。そんなら餘の事でもごんせぬお瀧さん。昨日爰の五郎市殿が使に來て。今の母様のあたりが惡にむごい。わび言してくれて、如才のない言ひ様。十一や二で思ふ様にはあるまいし。コレく雀殿。憎うてむごうしませうか。サアくそこもあるてや。あんまり可愛いと胸臆がまじつて繼子憎みになるもの。ハテ異な事の挨拶。繼子を憎むが天下の法度か。こなた衆の所へまで。地懺悔をいうて行く息子。あんまりかはゆうござらぬと。一蹴蹴られて道理々々。詞百よ。聞いて見ればおか様のが尤もさうな。繼子憎むは世界の大法。とかく息子が腹借らぬが誤。公事はさげた來い去のと。地差別知らずが燃える火に。フシ焚附かうて立歸る。地つらき親をば親にして。猶も機嫌をとる端香。愛想に汲んで五郎市は。しとやかに立出て。詞申し母さま。お氣が盡きやうと思ひ茶を入れました。地出ばな一つと差出す。はや小雀がいひしを根に持ち。詞何ぢや茶をいれたそりや誰が頼んで。そなたが飲んだ飲みあまり。口ふさげに持つて來たか。地アノ勿體ないなんの飲餘てござりましたしよ。初穂を汲んで參りました。詞ム、初穂を飲まして。此母を追出すのか。飲めなら飲まうドレおこしやと。地挽ぎとる拍子に情なや。仕立てし布子にざんぷりと。かゝりや繋がる親子とて。フシあひ見る茶とぞなりにける。地色我が誤も子に嫁する。まゝ母性根を顯して。詞ヤイこゝな龜相者。代りのない晴着。地よう此様にしたなあと。取つて引寄せ太股を。指先強く二つ三つ四つめの紋のつかみ染。ナウ悲しやと五郎市は逃げ廻り手を合せ。誤りました今度から。嗜みませう堪忍と。フシ詫びる目元もおろく涙。詞又泣くか。地吠えるかと。聲はしたなき。フシ折からに。地色人の女房の止水を飲みに廻る小鮎の源五郎。門口より差覗き。詞ハテこりや又親子喧嘩でえすか。性懲りもない息子殿。地笑止な和郎と座を占めて。詞コレお瀧さん。繼子の世話をやかずとも。俺が言ふ様にならんせんかいの。

地人にばかり思はせて。フシ氣強いお人と當擦る。詞又小鮎殿のじやら／＼と。そんな機嫌ぢやないぞや。地あつ
 たら口にはお風／＼。詞サア其風に實が入つて傍へ寄ると震ひ付く。機嫌なほしにちよつと爰をと。地手を取つて無
 理に引込む太股ふつり。詞アイタ、。こりや繼子殿の相伴だ。地扱も手ひどい御馳走と。顔をしかめて擦りある。
 詞ヲ、よい氣味の。傍に告人のあるも構はず。地好んで痛いめなさるゝと上手こかしを。コリヤなると。思うて何が
 な追従に。憎む繼子を取つて引立て。詞告人とは此和郎か。目離のないちよつぱり殿。地奥へ行て貰はうと。むごい
 を馳走に。フシ蹴飛ばせば。地五郎市むつと目に角を。立てがひもない親の前。詮かた涙押隠し。オクリ泣く／＼奥
 にフシ入りにける。地サア見る人もなし聞人もなし。主のあるこな様に。いひかけるから命づく。首を先へ投げだそ
 か。胴から下を受取る氣か。はずみ切つたお返事をと。フシしなだれかゝるを。そつと外し。詞夫五右衛門幸ひ宿に
 ゐらるゝ。其通り申聞せ。地急度お返事致さんと。立上ればア、是と。詞それいうて堪るものか。よい／＼さうあ
 るからは此方も意地づく破れかぶれ。御大切に思召すお配合の芥藻屑。いふ所へ行て申すぢや迄。地お暇申すと強請
 りかけ立つをお瀧は引留め。詞ソリヤこなたも同じ仲間。サア其仲間がいふからは慥かな證據。首投出してと申すは
 こゝ。惚れかゝるとぞつこん火へ陥るも構はぬ氣。地色なんと一度か二度の事。ヲツといふ氣はこんせぬか。詞そんな
 ら一度で大事ないか。半分でも忝い。幸ひ傍に人はなし。表を鎖してつい爰でと。地抱き付くを氣疎。それ／＼親仁
 の足音。詞アイ／＼呼ばんすもうそこへ。地そりやこそ爰へ出て来るわと。威せばうろ／＼狼狽へるを。無理に押遣
 り押出して。晩に／＼と一寸のがれ。二寸延びたる鼻毛の小鮎。内儀の泥に酔はされてフシ跡をも見ずし逃げ歸る。
 地色五郎市様子聞きながら。聞かぬ振にて奥より出て。詞申し母様。父様のお目が醒め。夕飯上ろと仰しやる。地わ
 し据えましょかと問ふも恐々。詞ヲそりやおれがしませう。其代りに縫仕事取置いて跡掃いて。日暮れになつたら火
 を點し。門も閉め庭も掃き。地遣ひ水から風呂の水。いひつけずと汲んで置きや。子供遣ふもア、世話と。オクリいひ

つゝ奥へ入る影を。打眺め／＼スエ恨み。涙にくれるが。思ひまはせば我が身程。親に縁なき　フシ者あらじ。
 地色ほなの母様ある時は父様とに氣兼する。今又父様とほんのなら。母様かが隔りて善き事しても氣に入らず。そと町より來る者
 まで見侮みなどつて足にかけ。蹴たり踏んだり何事ぞ。此家やにうか／＼暮すなら。まだ此上にどのやうな恐ろしい目に合ふ
 も知れず。何國へなりとも逃げ行かんと。表をさして駈出かてしが。ほんの母様の所は覺えず。どこを先途しやうどと立戻り。
 又駈出かしては行く先の。あてのないのに引かされて。行つては戻り戻りては。巷に迷ふ稚子の。フシ途方に。暮れて
 ゐたりける。地色五右衛門は寄合の。時分ならんと立出でて。詞五郎市よ。何して　地そこにと咎められ。イヤ何處
 も行きやしませぬ。お前は何處へと問ひ返す。詞ヲ、俺は寄合に。暇ひまは入るまいつい戻ろと。地いひ捨て行く袂に
 すがり。詞モウ今夜は何處どいも。行かずと内にゐて下され。地さなくば私も連れて行てと。おろ／＼涙の體を見て。
 思はずも打萎れ。詞何故なぜさう言ふぞ仲間事。行かぬと何かと後の邪魔。地ちつとの間ぢや留守しやと。厭いやせど猶なほもし
 くしくと。フシ涙に聲もおど震ふるひ。詞とゞ様。私はほんのかゝ様に逢ひたい。地去いして下され去いにたいと。泣き萎る
 れば五右衛門も。胸は張裂く思ひにてしばし涙にくれるが。詞ホヲ、道理ぢやさうあらう。常から女房めが仕方。
 いかにか己が子でないとして。朝から晩まで責め遣ひ。ちつとの事も大仰やうに。又しても打ち打。酷こい奴憎い奴。もう引
 提ひへ言はうかと。思へど胸を擦すつてゐる。腑甲斐ないと思はうが爰をよう聞け。父とはな。悪い商賣してゐる。今止やめ
 たう思へども。仲間事ゆゑ止めさせぬ。それをあの唄うためがよう知つて。雁かり見ての我儘氣まゝ。地今追出したらやら
 腹立ち。どんな事を吐はさうやら。殊に彼奴かれめが親は悪者。忽ち其方そや俺が身に。難儀のかゝるが悲しさに。何事も堪忍
 する。詞子心にも聞分けて。了簡りょうかんつけてゐてくれい。眞ほんの母にも他人が添そひ。今さら戻すも戻されず。地色其うちに
 思案しあんして憂うれい辛い目めをさせまいぞと。いひ慰なぐさむれば五郎市は。涙を袖で押拭おしぬぐひ。詞父様の苦になる事なら。打ぶたれて
 も抓つかられても。堪忍してゐませう。地其代りには何處どこへござろと。早う戻つて下されと。フシいひつゝ猶なほもしやくり

泣く。詞ヲ、聞分きわけがよいよ。惣別堪忍といふ事が人は肝腎。男と生れ堪忍のならぬは女房の間男まへおとこ。さては人中にんちゆうの面恥おもてづら。拳こぶし一つ當てられてもそこは男づく。其外は皆内證。堪忍が即ち辛抱。地ちつとの間の留守。辛抱して持つてみや。つい戻らうと懇ねんな意見ながらの言聞いききこせ。それが小耳にとまるとも。知らて五右衛門寄合のフシ時分遅しと出て行く。地是非も涙に門かどをしめ。内の灯火庭廻り。いひ付けられた荒増かみしほを。フシ片付け廻る折柄に。地色お瀧が親の無頼者なまこ。三三五郎兵衛しらにせの。指先うごく髭親仁門かどの戸たゝいて。お瀧くと呼ぶ聲す。五郎市扱は最前の。小鮒が來たと心得て。わざと其場を知らぬふり。フシ聞かぬふりして奥に入る。地色猶も忙いそしく叩くにぞお瀧も心ならねども。誰ぢや〜と咎め出で。俺ぢや開あけいは親の聲。又用無心か氣の毒と。思へど是非なく内へ入れ。詞日も暮れたにうと〜と。地何しにおいてと尋ねれば。詞何しにとは。娘の所へ親の來るが不思議か。地あた面倒なと膝打捲り。詞いふまいと思へどいはぬが損。聞くうちぢや聞けお瀧。此中借つた二十兩。昨夕ゆうべ五三たでころりとしまひ。跡をつなぐ種が切れた。五右衛門は宿にか。まあ十兩か廿兩。借る氣で來た言うてくれ。近年見たがはやり出で。ア、胴も合はぬぞいと。地咄し出せば。詞ア、もう其咄聞きとむない。地小判の生る木もあるやうに。又しても無心。主の手前ぬしへ私も氣の毒。殊に今夜は留守。マア往いんで下さんせ。詞イヤ往いぬまい。汝わこそさういふ五右衛門は。金の生る木があるげな。毎晩々々甘い商賣。元手入らずの捌取りつかり。ようごろが來ぬなあ。今夜も働きの留守ならば戻る迄待たう。むすめ。けんく言ふなやい。何にも知つてゐるぞいと。地底氣味わるき一言に。くわつと胸まで追上し。詞コレ親仁さん。人の事でも大事小事。あじやらにも言はぬもの。いうてよければお前もの。京の島原で置土おけつちの九郎次を殺し。難儀に及ぶを五右衛門殿の。思案一つで事無うしまひ。親子共に恙つがなう。今日迄暮すは誰が蔭。地其恩を知つてなら苦口にくぐちいはんす筈はない。金借る度にいたかはなせ。さう胴慾にはいはぬものと恨み歎けば喧やかましい。詞そりや有つて過ぎた事。今でも金を借せばよし。いやといふと此村の庄屋へ行て。夜の商賣いうて來る。地それとも五右衛門が心底次第。

眠る迄へん／＼とかうしてもゐられまい。寢所せい寢てゐよう。詞そんならどうでも逢ふ氣かえ。逢はずといつて庄
 屋殿へ行こか。サアそれは。なんと。地色ハテ寢て待つ氣なら此一間。寢所して上げましよと。暗いをふせぐ明り障
 子引開くれば。詞ヲ、よい合點。汝も五つから俺が手じほ。いつ孝行な事もない。來てちと腰揉め足擦れ。嫌といふ
 と庄屋殿と。地威し立てられ是非なくも。ハテ撫て擦りて濟む事なら。致しませうと伴うて。入るも疵持つ足の裏。
 オクリ篠原へならぬ。フシ藪垣の。フシ隔つる思ひに。五郎市は。小鮎と心得奥の間の。親の差添そこ愛と。尋ね廻れど知れ
 ざれば。勝手の手戸棚を心ざし。捜し當りし修羅の一腰。そつと拔取り小脇に搔込み。おのれ最前蹴た意趣と。父の眼
 を抜く不義者め。たゞ置かうかと忍び寄り窺ひ聞けばお漣が聲。詞申し。お前とわしとは因果な縁。切らうというて
 も切られぬ。今にも夫が戻られては。意地づくでどうならうも知れず。私可愛いと思うてなら。まあ往んで下さんせ。イ
 ヤやなぬ。小言いふと五右衛門を。逆礫にかけさする。殺そと活そと俺次第と。地廣言吐くは憎さも憎し。往ぬる
 所を殺さうか。詞寢てゐる所を突かうかと。脇差抜いて子心に取つつ置いつの一思案。地色かくとも知らず五右衛門
 は。さぞ待ちかわんととつかはと。歸る表の足音を。人こそ來れと五郎市は。心急くまゝ障子越し。ぐつと突いたはお
 瀧が胸腹。わつと魂切る聲に驚き。ヤレ人殺しと三三五郎兵衛。フシ奥を指して逃げ入れれば。五右衛門の戸蹴破つて。
 見れば女房朱に染み。五郎市は人違へと。うろつくを取つて引寄せ。詞ヤイ忤。恨あるは道理ながら。母と名がつき
 や親殺し。辨別知らぬか痴呆者と。地叱りつくれば聲ふるひ。詞母様を小鮎めが女房にしをる故。小鮎を殺すと思
 たら母様でござつた。地堪へて下され怪我であつたと。あどなき詞も聞咎め。詞何といふ。嗔と小鮎が不義したとや。
 其又相手は。奥へ逃げて行きました。地扱はと目がけ駈行くを。ノウこれ待つてと手負は呼びとめ。詞其逃げたのは
 私が親。三三五郎兵衛殿。あの子がそれと知らぬも尤も。今日晝小鮎が無體の戀慕。嫌といへば身を捨てゝ訴人に出
 ると阿房の一徹。地色もしやと思ひ宥めて歸し。今宵忍んで來る約束。思ひもよらず。親仁殿が見えまして。詞又金

の無心。お歸り迄待つとて。一間にわしと差向ひ。小鮎と思ひ違へたは。地あるまい事では無けれども。親と名のつく自らを。殺してあの子の身の科が。何とあらうとそれが悲しい。やつぱり不義で見付けられ。自害と沙汰して下されと。スエテ思ひ過ぎする。心を疑ひ。詞ヤアしらゝしい。左程いたはる五郎市を。是まで酷く責め遣ひ。今さら悲しい不便だとは。地追従らしいおけくと。つつけりいひ出す詞の内。苦しき身體押直り。詞コレ五右衛門殿。今死ぬる身が何の追従。こなたは又五郎市に。何老舖の何商。何さす胸で連れて戻つた。地色女房にさへ暇の状。まさかの時は他人向と。常からのいひ聞せ。男の子は夫に付き。どう言ひ抜けても。フシ通れぬぞや。地色たとへ別儀ないとて。鬼でもならぬ恐しい商賣。こなたはそれを譲る氣か。可哀さうに美しう。生れついたあの顔を。撞木の上に曝さうかと。それが悲しさ愛しさに。追出す種の無得心。早う此家を逃げよかし。母御の方へ去ねかしと。打擲するもこなたこそ。一生その身で果つるとも。せめてあの子は。人にしたさにと。わつと泣入る眞實を。地聞いて五郎市泣き出し。かゝ様堪へて下さりませ。何にも知らいて恨みました。ひよんな事して切りましたと。悔み歎けば五右衛門も。至極の涙に咽びながら。詞一寸の蟲にさへ五分の魂あるといへば。まして我とても悴を連れて歸りしより。たとへしつけぬ荷步行持。人の籠を廻つても。ふつとりと止めうと善心に。もとづく甲斐も情なや。地色同類數多に絡まされ。止めうというても止めさせず。超鳥にかゝる此骸。追付刀の錆屑と。なる身をせめてそなたとなう。代つて死んだら果報ぢやに。科なきそちは先へ立ち。罪ある我は引残り。責め詞まれ死ぬるであろ。疊の上での臨終は。羨しいと掻口説き。ハルシ男。泣きにぞ泣き居たる。地色今になりて五郎市を。引寄せて打眺め。詞愛しやえ迄氣の苦勞。怪我でないとて殺すをば。無理とは更に。フシ思はぬぞや。地色其代りに佛壇に香花さらして下さるな。四十九日は家の内に。迷ひあるとの事なれば。直に手向を受けませう。名残惜しい我が夫。苦しいわいのといふ聲も。無常の嵐一吹に。吹き散らされて敢なくも。フシ此世の縁は切れにけり。地ナウこれ母様々とすがる我が子の歎よ

り。堪へかねたる五右衛門が。身を震はして噎り泣き取亂したる。フシ折からに。地色一間の内より三二五郎兵衛。始終を見届け飛んで出て。詞ヤア遁れぬところ五右衛門。餓鬼めは即ち親殺し。此旨上へ言上と。地いひ捨て既に駈出すを。南無三寶と飛びかゝり。何の苦もなく引揃み。有無をいはず氷の双ぐつと突込み一剣り。剣る間に向ふへ提燈。人こそ來れと死骸を投げ捨て。やがて我子を引立て。詞是からが身の大事。そちも親を殺すれば。我も舅の命を取る。二人共に親殺し。地此場にゐられずサア來いと。肩にフシ引掛け出る所に。約束時分と小鮒の源五郎。のろゝと小提燈。明りにそれと見るより五右衛門。此奴故と飛びかゝり。躍り上つて眞二つすぐに立退く八聲の鶴。こつか高野をあてにして飛ぶがごとく。三重出てて行く。

下 之 卷

ハルフシ身の科を。數へゆく身の果敢なくも。地翅鳥にかゝる五右衛門が子に引かされて遠近の。フシ人目を忍ぶ破れ笠。子にも小笠を拾ひませ。三里夜の内明方に伏見の里の藤の森。フシ街道筋に着きけるが。地色貯へなければ五郎市に認めさせる便りなく。途方に暮れてゐる折節。長袖武士と思しき乗物。八幡下向の朝戻り何恐れなき物詣と。見込んで五右衛門近く立寄り。詞鹿忍ながらお乗物をお侍と見うけ。旅疲れの浪人がお願ひの筋あり。地色御聞届けと餘儀なくも。言ひかけられて乗物をフシ傍におろす其内に。地色五郎市に指さしたる脇差取つて小腰をかぎめ。詞某一人の悴を連れ。長途の路銀遣ひきらし差當つての難儀。何とぞ此一腰。御求め下されば御恩ならんと差出す。地色乗物開き出づるを見れば七十越した白髪の老人。悠々と。フシ挾箱に腰打掛け。地色目鏡を力に一見致さん。詞どれお腰の物と手にとつて。地ためつすがめつ。詞ム、鰐はかんと身はせき打。地見れば見る程其昔我が子に付けて捨てたる一腰。ハツト驚き。詞これ〱旅人。是は他所より求められしか。地もとの出所不審しと。詞の内より。詞イ

や御念に及ばず。即ち某忤の時分。後の印と親共より。添へ置かれたる一腰と。地聞くより扱は我が子かと飛付く程に思へども。豫てよからぬ噂は聞く。今の風采家來の見る目。かたぐい愧ぢて心を鎮め。詞ハテノウ左様かしてあつばれのお道具。なれども持人の根性が双物にうつり。あつたら事は落ち難い錯が出ましたよ。切先にこぼれ疵。疵ある性は直り難く一生が亂れ焼。鐔はねぬけ。古いをおもとと賞翫すれど。友傍輩の附合が悪しく。地金をあらはすもめんずれ。地目貫の龍は後藤なれども。勢なきは雲霧の間に住むべき所なく。逃げ彷徨ふ有様。詞自慢の鯨も出所はよけれど。親が放れて他人むき。地子は子と思へど傍あたりに。目利があれば初の生れといはれぬ。詞はてなうあつたら恰好で。見すばらしい此脇差。地色老の見る目も情なしと。物に寄へし心と知らず。詞イヤはまで幾人か手覚え。忤が僅かな小腕にさへ突留めたる業物。拵に構はずとも。地切れを見込に御求めと。いはせも立てず。サアサアその幾人が手覺が尙氣遣ひ。殊に御子息の小腕。突留めたとハア心許なし。御存じない興物語なれども。某もその昔男子一人儲け。仔細あつて捨て申した。地色もしその捨てられた忤。御自分のやうに流浪致し。親に捨てられずはかうあるまいと。恨うかと存じお咄申す。詞若き時分月も忘れず正月庚申の日。お館は庚申待。奥女中に戯れ。一夜の契に子胤をおろし。生れたは月足らず九月廿日。又是も庚申の日。庚申の夜盜をすれば顯はれ。其夜懷胎の子は必ず盜するとの俗説。地色信ずるに足らねども里にやれば突展す。養子にやれば目遣ひが悪いと厭うて貰人なし。仕官の身の是非もなく此里の野はづれに捨て。河内の土民を頼み。拾ひ養ひ貰ひしが。人と成つて都へ上り俗説に違はず。事を仕出して都を追放。扱こそわがため敵ぞと。思ひ切つてはありながら。次第に寄る年くる日數。人懐しき折柄は思ひ出して我と我が。心に行方をとふばかり。もし其許の所縁の内心當りの人あらば。地傳へてたべと打つけに。いひ聞かされて五右衛門は。その捨子こそ某と。言はんとせしが。詞いや。地聴きお心脇差でそれと知つても他人むき。殊に我は重罪人。後の咎もいかゞと。心付きてよそ。詞ありし昔の物語我が身のやうに存ぜ

られ。思はず落涙致しました。定めてその後其子息氣も改り申さんが。情なきは是迄の罪滅せず。今にも繩目の恥を受け。親あるなどといはれては不孝の上の不孝と思ひ。地わざと見ぬふり聞かぬふり。よそにあしらひめられまじよ。と斷いへば。詞その心ならまだしも。地色せめて其許の子息を我が孫と思ひ。餞別を致さんと金一包取出し。詞黃金は朽ちても朽ちせぬまつ其ごとく。惡事も亦末代まで其名は朽ちぬと心得。親の性根を見習ふな。地色對面も是限り。後世菩提はいづれとも。弔ふべき者は。定らずと泣く／＼立つて一腰も。共に渡して乗物へ。涙隠しに入り給へば。しほしと留むる甲斐もなくはや乗物を昇き上げて。フシ心もなげに急ぎ行く。地跡懷しく五右衛門は打萎れ。フシ涙ぐみ。地色現在親を親とせず子を子とさせぬは我がなす業。此罰にても極重の罪科のがれず淺ましやと。先非を悔いてしやり泣き。フシ詮方もなき折柄に。地色自業自滅の時來り追手と思しき捕手の役人。それ五右衛門よあますなと四方より追取卷く。コハ叶はじと五郎市を崇道の宮へ押遣つて。其身は封豕を小桶にとり。力士のごとく踏跨り。段平刀抜いて待ちかけたり。捕手の小頭早野彌藤次捕繩手操つて。詞ヤア／＼五右衛門。是迄なしたる惡事の段々残らず顯れ。其上翦を手につけ。悴は母を殺したる様子。三三五郎兵衛に止を刺さざるゆゑ委しく白狀。遁れぬ所腕まはせ。地繩をかゝれと呼はつたり。地五右衛門ハット止の事。思ひ出して後悔も。かなはぬ所と胸をすゑ。詞これ／＼役人。舅は勿論女房も某が殺したり。悴が存じた事にもあらず。彼が命をお助けあらば尋常に繩かゝらん。さもなくば死物狂ひ。有無の返答承らんと身構す。ヤアいらざる悴を庇ひだて。はや先だつて上聞に達し。親子共同罪との仰せ。地かなはぬ事と聞くよりくわつと眼を見ひらき。詞さうお言やると片端切つて／＼切抜ける。搦めとらば取つて見よと。地いふより飛付く捕手の人數。得たりと眞向後袈裟。三の胴の車切り。腰骨脊骨きらひなく爰を最期と三重へ切散らす。地さしもの捕手も手にあまり。加勢を入れんとひしめく所へヤレ暫くと聲かけて。親の兵部は老足の心も空に取つて返し。小頭に打向ひ。詞科人は石川五右衛門とな。仔細あつて彼めには重々遺恨あり。地色某に御渡しと。願へば繩

藤次。貴殿は何誰。詞三位中將が家來岩木兵部。ムウ今御發向の諸太夫據は無けれども。中々老體の手に及ぶまじ。地お怪我あつては氣の毒と。聞入なければ押返し。詞もし捕り損じ候はゞ。老の皺腹致す迄。地武士は互の遺恨ばらし。是非にと餘儀なくフシ頼むにぞ。地色然らば加勢なされよと。指圖嬉しく向ふに進み。詞コリヤ／＼五右衛門。以前の意趣をはらさんため岩木兵部が向うたり。切抜けるなら抜けて見よ。老の手並を見せうぞと。地表は怒り落ちよかし。逃げよと知らず眼つき顔付。扱は助けて其代り腹召されんのお心か。ハテ是非もなや此場こそ。我が絶體絶命と。思ひ定めて。詞コレ／＼兵部殿。成程恨をはらさせんが。心入あり貴殿の養子。當馬之丞を呼びにやられよ。地一言申す仔細ありと用ありげなる詞のはし。詞ヲ、幸ひ某迎ひのため。稻荷まで来てあつらん。地色それ呼び來れ。と早使。忙しき中に双方がフシ一息ついて待つ所に。地程なく來る當馬之丞。かくと見るより吃驚。驚隠す五右衛門かけ聲コレ／＼當馬。詞我が運命今日に極る。親父が遺恨をはらさんとして向はれたれども。捕り損じ切腹召されん事笑止に思ひ。手にたつ貴殿を呼びに遣はす。地親に代つて働かれよ。用捨はないと立向ふ。是ぞ以前の恩返しと。早くも悟つて當馬之丞。詞心ざし奇特なれども。今町人になりたる某。武士でなければ手柄望まず。切抜けなりとも。勝手次第と言ひ放す。ヤアその町人には誰がしたぞ。刀を折つたその恨み。今はらさいて何時はらす。一生氣樂に町人とは。養父へ對して大不孝。とても遁れぬ五右衛門が命。他門へ渡して心がよいか。地狼狽者とフシ氣をつけれれど何さまもはや遁れぬ所。他へ渡しては本意ならず。せめては彼が志。無足になさじと身構へし。詞ホヲ、盜賊はすれども流石は筋目。先知に代へし養父の家。相續させんとは祝着々々。さりながら。得心の繩かけては役なし。誠切抜ける所存ならば。あつばれ手柄に捕つて見しよ。ヤア一旦は男づく。此上何故用捨せん。捕手數多の見る前。潮う我捕れよ。捕るぞよ。捕れよ。サア。サアと。地睨みあへども心は一致。こなたは首尾よく捕られんとフシ目處を外して切付くる。地逃がば逃げよと捕りかぬる。親の兵部はあぶ／＼と養子が手柄も望めども。現在實子が虎口の命。

助けたや逃したやと。老の思ひは千變萬化。捕手は四方に目を離さず通れ難なき罅の口。程よく五右衛門切込む拍子。躑き伏すを取つて押へ。是非なく縄をかけるうち。役人社内に駈入つて五郎市を高手小手。親子を共に番ひ鳥。なく昔は老の胸の内。共に悲しむ當馬之丞。凋れし聲も御法の呼はり。詞盜賊の張本。石川五右衛門親子の者。牢屋へ引けと引立てさせ。地行くも涙の柵や壊かれ。つなぐ縁の綱。結びついたる行合兄弟。千筋の縄も跡につき。共に警護の。うし綱や是非なく。／＼も三重引かれゆく

道行街の手向草

タ、キつくりおく。ギン罪が須彌ほどあるならば。ギン閻魔の廳につけ所。ナホスなしと五道を。フシ踏み迷ふ。あさき石川五右衛門が身より出せる錆刀。なせし惡事の無量業。スエ數は船にも車にも。オクリ罪科。重き親と子に乗せたる駒の首綱や。かゝる憂目にあらけなく。絡み付いたる縛は。暗き冥途のフシ鹿島立。二條大宮東へと。ギンオクリ引かる。道に立集ふ群集をはらふ警護さへ。長地聲をひしぎの割竹はさながら訶責きらめきし拔身の槍も此世から。劍の山か焦熱の。油の小路沸らして。小オクリ小石。小川も諸共に同じ處刑に釜の座と。氣を空蟬の烏丸。かはい。／＼と人毎の聲を力に引かれゆく。子は父親の。成佛と後手に珠數くるまや町。フシあと見返れば。地五右衛門は我が子の姿見送りて。此身を先へ引かれなば見窄しげなうしろ影。見まじきものと胸迫り。スエテ聲も涙にかきくれて。詞御見物のいづれもへ。かく我々を見せしめと。生恥さらすも前世の業。地本來一物なき時は。善惡。邪正の分隔。なしと思して一遍の。フシ御回向。なされ。フシ下さるべし。地大木になる楠も二葉の時は童に。摘みとらるれどおのがまゝ。繁れば後に石となる。われが盗みもその如く。始めに思ひ止らずし。一度はまゝよ。二度は大事か三惡道。今日といふ今日親と子が。釜煮の油責現世に報ふ阿鼻地獄。あると知らざるフシあさましやと。二人鉢タキ涙の限り

聲限り。悔み叫べど其かひも。ないて歸らぬ身の越度國の掟を。フシ堺町。シテ地親の嘆きの聲につれ。又思ひ出す五郎市が。涙の顔を振上げて。此多勢の中にさへ母様はなぜ見えぬ。わしは他人の御回向を。うけずとも母様に。逢うて死にたい顔見たい。クル逢ひたいわいのと身を悶え。差臍向けば黒髪の。中フシおくれを。傳ふつゆ涙。二人ハルフシ柳の馬場に。雨模様空かき曇り日陰にも。嫌ひ憎まれ世の人の疎み。はてにし身の上も。たゞ往生は。三下リタ、キ駄屋町に。シテもしや佛の御幸町。ワキ心の闇をてら町と。シテさして行くみち法の道。ワキ逆縁ながら浮むべき。シテ頼みは彌陀の誓願寺。一念發起。菩提心。二人ギン子はまだ養の河原ナホス町。菩薩の御手に招かれて。いざ松原と聞くならば五條の橋に取付いて救ひ給へと一心に。頼めとばかり教へられ。顔くばかり。クルフシ泣くばかり。ハルフシ見交すばかり。恩愛の薄き契の哀れやと。深片手に見る人も。ギン見らるゝも夢世の中の。怨と惡とにこり木屋のフシ町をはづれて野嵐に。嘶ゆる駒の足はやみ最期場近くなりければ。見物群集とりぐに宗旨々々の手向草。題目、眞言念佛の。聲は高瀬や六字づめ七條。河原に三重へ着きにける。

地仕置の場所は七條河原。二町四方に垣結ひ廻し。内に立てたる拔身の鎧。鼎にすゑし大釜はフシ地獄の。責を此世から。ハルフシ見に集りし。群集の中。先を拂うて早野彌藤次。岩木當馬も相役に。いひ付けられて是非もなく。フシ床凡にかゝる後よりも。地色親の兵部は心もそら。叶はぬながらも立向ひ。調承れば五右衛門を。此所にて釜煎とや。是迄盜賊の仕置は討首。地古來稀なる御制法といふを打消し。詞イヤ。それは彼が科のなす所。先づ立歸りの科二つには。去生島原にて平の平平を殺し金をとり。三つには此度舅を手につけ。一味の輩を白状せず。成程酷き罪に行ひ。同類をいはずと用捨なき御上意。地役人の私ならずといひ聞かされてハツトばかり。返す詞もなき中に。調然らば伴五郎市とやは。實の母があると申す。さすれば親殺しとも申されず。地是は何故同罪ぞや。詞コハ改りしお尋ね。後の親を親とするが天下の掟。スリヤ是も遁れずか。いつかな。ハ。ハレ。地不便千萬と。よそにはい

へど心は闇。スエテ老の奥歯を嚙締めて。フシ泣く音を隠すばかりなり。地かくと聞くより母のおりつ。息を切つて
 匿着けしが。夫當馬が今日の役目思惑いかゞと垣の外。うろつく内に引出す。オクリよそのへ見る目も哀れなれ。ハルフシ親
 にも子にも。首枷の脊に細繩のフシ菱の紋。締附けられし後手は。本フシ鮠にかぐみて鑰に折れ。血の通ひさへな
 つ草の。焼付けらるゝ身の上と。オクリ思ふ。心の。はかなくもフシ打しを。れてぞ座になほる。地彌藤次いかゞ思
 ひけん親子の縛解かせて。詞なんと五右衛門。様々の責苦に落ちざれば。今日は釜の罪。忤五郎市を不便に思はゞ
 一味の盜賊残らず白狀せよ。地萬民の苦しむる賊徒。狩取らするがお上へ奉公。此理をよく辨へよとフシ柔を。以て
 問ひかくる。地五右衛門ちつとも悪びれず。詞御尤もの仰。殊にあれに御老體。相役當馬殿の思召にも。子は不便に
 ないか。苦痛さするを思はぬかと。地御蔑みもあるべきが。たとへて申さば盜賊は國の鼠。取盡すに盡されうや。詞僅
 か手下の五十七狩取らしたとて。さのみ天下の助にもならず。地萬民のためならば只用心に如くはなし。詞取らる
 る油斷あればこそ取る盜賊も出來申す。地五右衛門が最期の一句はかくばかり。詞石川や。濱の眞砂はつきるとも。
 地世に盜人の種はつきまじ。重ねてお尋ね御無用とフシ何の。にべなくいひなぐる。地色氣の毒あまり當馬之丞。詞コ
 レサ五右衛門。其身は格別忤が苦痛。地又外々へどうつて。誰が悲しみにならうやら。思ひはかつて白狀し。輕き
 罪にあはれよと。兵部や妻の心をば。フシ思ひやりつゝ制すれば。詞愚かの仰や。是迄妻子一家にも。語らぬ事をい
 ひ合せ。大事を計りし一味の同類。地いづれをそれと名指しがならうか。よし白狀したりとて。忤が命助かるにもあ
 らず。悪事をなさば悪事を立てぬき。釜に入らうが火に入らうが。未練な同類指すなどとは。思ひもよらず。詞ヤイ
 五郎市よ。苦痛というて半時か一時。死ぬるは切ないものと心得。父が子ぢや狼狽へな。熱いといふもちつとの間。
 地怖い夢ぢやと思うてゐよと。賺せば何にもえ言はずに。しく／＼泣いてゐる體に。強き心も弱りはて。スエテ共に
 涙に沈みしが。人目思うて泣顔隠し。詞そちは死ぬるが悲しいか。卑怯な父が子でないぞと。地覺悟せんと恥しむ

れば。五郎市涙の聲ふるひ。詞卑怯ではない父さま。道々もいふ通り。地私はま一度かゝ様に會ひたい。會はして下され拜みます。死んだらモウよう會はぬ。それが悲しうて泣きますと。しやくり上げたる哀れさを。聞く親の身も世もあられず。わつと泣出す聲につれ。役人下僕も共泣に。フシ袂を。擲るばかりなり。地色さすがに剛き五右衛門も。不覺の涙に洗みしが氣を取直し。詞それは何をいふ五郎市。母はそちが手につけ。其科故この仕置。會ひたか冥途で會はしてやらう。イヤゝそれは後のかゝ様。地初の本の母さまに。會はして下され會ひたいと。泣くを消しかね答へかね。詞會はしたうても會はされぬがお上の掟。聞きわけよ五郎市。父に如才があるものかと。地するも涙見る涙。コハリはや鼎には煙立ち。フシ時刻移ると迫り立つる。地色未練と人々笑はんと五右衛門突立ち。我が子を取つて脇挟み。時一寸を待つも惜むに似たり。とても通れぬ今日只今。いづれも念佛頼むぞといひ捨て釜へ。フシ飛込めば。地色兵部當馬ははつと氣も落ち。堪へかねたる母のおりつ。垣押破り走り入り。ヤレ五郎市よ母なるは。可愛の者やと駈寄るを。當馬之丞押隔て。詞眞の母にもせよ縁切つたれば今は他人。其理を以てお祟なきを有難いとは思はず。何面目に我が子呼はり。近寄る事は叶はぬと。地差留められて聲をあげ。ナウ情なや恥かしや。我が子といへば盗人の。妻と定る恥辱にも。かへて駈出る親心。推量して只一言。暇乞さしてたべ。恨めしいは五右衛門殿。こなたの心を直さうばかり。五郎市を戻したに。共に惡事を見ならはせ親殺しとは何事ぞ。仕置も多いに釜煎とは。あんまり酷い胸慾な。かうなる事と知つたらば。戻すまいもの悔しやと。ノルフ身を投げ。伏して泣きあたる。地色釜の中より五郎市は。延上りゝ。詞母様よう来て下さつた。會ひたうてゝ。泣いてばかりあました。父様と一所にモウ爰て死にます。死んだ後でも人殺し。親殺しといはれても。なした業なら是非ないが。盗人の子といはるゝが。地私や悲しい母様。人がいふなら言ひ消して。お前の子ぢやというて下され。詞御見物様いづれも様。親殺しも人違へ。怪我であつたつと了。地御回向頼み上げますと。わつと泣出す心根を。思ひやりつゝ人々も。フシ哀れと共に袖しぼる。地色五右

衛門悲歎の涙ながら群集に向ひ聲を勵まし。詞この多勢の其中に。財寶を我に奪ひ取られ。よい氣味とも憎しとも。又仇なき其人は。不便とも思えんさりながら。めん／＼我身の手本ぞと。地思うて念佛頼むぞや。詞盜の元は偽より起り。偽の始は身持から。若いお人は取分けて。色狂ひ小博奕の。つばめを合はす筆のさき。地後に手先がはたらいて。主親の物他人の物。一人の方人二人の味方。三人五人と枝葉つき。止めうというて止められず。坂に車を轉すごとく。車は早く心はあと。悔んでかへらぬ釜の罪。我が身ばかりか悴まで。苦痛をさする悲しさを。推量あつて一遍の。御同向頼み上げます。未練な最期も子故の闇。スエテ面目なやとせき上ぐる。地心を思ひ諸見物。兵部おりつは正體も。ないて返らぬ親と子の。フシ別れはさぞと知られたり。コハリはや顛倒の時來り。釜に油のいきり立ちたまぎり上る其音は。鳴神よりもフシ恐ろしく。フシ見る人ごとに。身の毛だつ。中に哀れは五右衛門が。我が子をかばふ其有様。親しき二人は氣も狂亂。さすがの當馬も顔そむけ。役目で責むる彌藤次も。白狀せよゆるめんと。フシいうたばかりに。フシ目もやらず。地色性根亂るゝ五右衛門が。子を思ふ氣の遣る瀬なく。片手に掴んで五郎市を目よりも高く差上げ。暫しなりとも苦しみをさせじとこそは。フシ身をまがく。コハリ油は次第に煮えあがり五體もあからむ詞實の責阿鼻。焦熱を此世から。ナホス地見る親よりも見せる子に。迷ふ心の不便さを見かねて當馬聲をかけ。詞ヤ／＼五右衛門。とても遁れぬ悴が命。庇ひだてする見苦しさ。後で苦痛をささうより。なぜ一思ひに先だてん。地血迷うたかと教へはげに。尤とは思へども現在親の手にかけて。何とせん彼とせんと。差上げたり下したり。見る苦しみは恩愛妹背。叶はぬ時の今はの際。いなゝき響く大聲にて。詞五郎市父が先驅せよと。地ぐつと突込む釜の底其身も共に打重り。狂ひ死せし石川が。釜煎の跡淵となり。七條河原に名を残す。釜が淵瀬の物語。ギン傳へ／＼て今こゝに豐の。竹の一ふしに御代萬。歳を書き残す。